

Angels' Voice

Lentamente

パンフレット無しで式文・祈祷・応誦等を淀みなく



礼拝とオルガン

フランチェスコ 幣原 映智

オルガンなしの礼拝式

昨年7月、イタリア、アッシシ逗留中の日曜日(6日)に聖フランチェスコ教会に参詣した。私が出たのは英語礼拝である。早めに入り、複数の聖職(神父)から参堂の承諾を得て、主礼拝堂の信徒席第2群の2列目中央辺りに座を定めた。天井はドーム型、縦横斜めに支える梁の装飾が美しい。正面の祭壇の後方に聖職や要人のための内陣席があり祭壇上部のドームには聖画が描かれている。オルガンはない。

第1群の信徒に対して、私達の「週報・特祷・日課」に相当すると思われるパンフレットが配布されたが、第1群の全員にさえ行き渡らず、当然私は入手できなかった。

入祭聖歌は予め司式司祭の指導の下にテンポ、フレージング等を定めていたが、その際に主唱歌手も指名されたい。小鐘の音とともに式は始まり、信徒席の修道女が非常に緩やかなテンポで、厚みのある豊かな声に乗せて聖歌を歌う。プロセッションはなく、聖歌隊もない。主唱に導かれて会衆は声量を抑えて歌っている。無伴奏の斉唱だが、歌の楽句・楽節・小楽段等、曲の区切りとなる持続音には上方3度と下方3度の和音を他の修道女が即興的に、正確に添える。今やカトリックの典礼改革は広く進み、この聖歌もプロテスタント教会の賛美歌風である。入祭の荘厳な気分に対応しい非常に静謐な美しい歌唱であり、曲も曲名も歌詞も分からないが、深い心のこもる音楽であった。全会衆に「参入」の心構えを見事に形成した、この修道女達こそ歌の「奉仕者」である。歌は心を持っている。

印象深く感じたのは、周囲の一般会衆の多くが

唱えていたことである。Pax Domini で、臨席の人達と握手を交わした後、そのような敬虔な白シャツ・短パンの若者2人組に向かって、ミカエル風の合掌で挨拶を送ると彼らは両手を挙げて応えてくれた。深い感謝の思いとともに教会を退出すると、鐘楼の全ての鐘が熱狂的に鳴り渡り、私達への盛大な祝福の響きと聞こえ、喜びは更に高まった。実に、鐘の音も心を持っている。

オルガンとの出会い

1967年夏の1ヶ月間ローマのカトリック聖心大学の「イタリア語・イタリア文化夏期講習会」を受講した。大学には壮麗な礼拝堂があり、立派なオルガンが設置されていた。オルガン修行中のオランダ人受講生が、その礼拝堂での練習を許されていた。オルガニストを目指す彼がある日、演奏室に私を招いてくれた。彼は母国やドイツのオルガンについて色々話してくれ、それに比べると「このオルガンは極めてロマンティックだ」と音を弾いて聴かせてくれた。振り返ればこれがオルガンとのささやかな出会いであったと思う。講習会終了に近い日の夕刻、礼拝堂で開かれた演奏会で数曲を聴かせてくれた。

当時私が非常勤で勤めていた武蔵野音楽大学には立派なドイツのオルガンがあった。この大学は元来ドイツ鼻根で、多くのドイツ系の演奏家・研究者を招いていた。少数とは言え、フランスからも重要な音楽家が招かれている。即ち1974年来学したパリ・ノートルダム聖堂のコシュロー(Cochereau, Pierre)と、サントウスターシュ聖堂のグユー(Guillou, Jean)との2人の大家である。私はこの大家達の奏でるそれぞれのフランスの響きを聴いた事を記憶の宝と感じている。

開眼は神戸聖ミカエル教会で

一昨年遂に神戸聖ミカエル教会にパイプオルガンが設置された。昨年夏の不調を克服して、2014年10月25日に開かれた奉獻1周年記念コンサートは、聖ミカエル大聖堂の画期的な音楽行事となった。優れた演奏家達の心から流れ出る美しい響きに充たされて、聖堂さえもより荘厳に装いを変えたように思われた。圧巻はボエルマンである。転調の多彩、豊かな和声の輝き、いわゆる後期ロマン派のオルガン音楽がこの聖堂に圧倒的な美しさで展開された。響きは消えても、この喜び、驚倒、感嘆、感謝等の念は益々鮮やかに生き、胸を熱くする。

オルガンのある礼拝

与えられた聖堂、鐘、相応しく選ばれたパイプオルガン、優れた演奏者に、そして信徒のために祈りの場を整えてくださった主教様はじめ聖職の先生方に、また和と奉仕に献身される敬虔な方々に、感謝を奉ずる。さらに一切を見通し、取りはからわれた在天の主に、このみ恵みの喜びと感謝を捧げる。

パイプオルガンのある礼拝を授けられた幸福をただ感じるだけでなく、これに立脚して、私ども一般信徒も心を一にして、礼拝の中の聖歌を整える努力を払い、典礼の深化と完成に微力を捧げたい。全ては信徒の心構えに掛かっており、全てはこれから始まるのだ。

(神戸教区パイプオルガン委員会・委員)

宮崎光司祭に聞く！

現在の『聖歌集』は、発行されて来年で10年を迎えます。聖歌集改訂委員として聖歌の改訂作業や作詞など、さまざまな作業に携われた立教大学チャプレン・宮崎司祭にお話を伺いました。

Q、『聖歌集』では、「アーメン」が少なくなりましたが、その理由は？

A、栄光の歌「栄光は父と子と聖霊に／初めのように、今も、世々に限りなく」に「アーメン」が付随するという、キリスト教聖歌古来の伝統に戻ったからです。これは今日の世界的な流れ

です。従来の聖歌集のように何もかも「アーメン」と歌い終わると、礼拝の流れが損なわれる気がします。

しかし一方で、「アーメン」を歌いたいという思いも根強くあったようで、『讚美歌21』は「アーメン」を別譜として載せ、自由に選択できるようになっています。

なお、『聖歌集』179番では「アーメンは楽曲の一部」という理由から栄光の歌がなくても「アーメン」をつけています。

『聖歌集』の冒頭「この本の使いかた(聖歌)」Ⅲページの「⑦アーメンについて」に説明が載っています。

Q、聖歌には民謡のメロディがたくさん使われていますね。その理由や歴史は？

A、さかのぼれば古代ユダヤ教の時代、当時の民謡や流行歌にのせて詩編は歌われました。聖公会としては20世紀前半、英国の作曲家 R. ヴォーン・ウィリアムス(1872-1958)がイングランドを周って人々の口ずさむ民謡を収集、採譜しました。集められた伝統的な旋律や民謡は聖歌として相応しく編曲して整えられ、*The English Hymnal*(1906)に収められました。

Q、聞き伝えで歌い継がれてきた民謡の旋律には「力」があり、聖歌として時代や国を超えても私たちの心にも響いてきますね。

A、聖歌85番「ああベツレヘムよ」はアメリカで創作された曲ですが、同じ歌詞で86番の旋律 FOREST GREEN は、1903年 Forest Green 村に住む人が歌っていた旋律をヴォーン・ウィリアムスが採譜して編曲、*The English Hymnal*に初めて聖歌として収めたものです。



(写真左：宮崎光司祭)

Q、聖歌を歌う時、大切にしたいことは何ですか？歌詞を理解し、いきいきと歌うためにはどのようにすればいいのでしょうか？

- A、1、歌詞を声に出して読む。
2、歌詞の元となっている聖書箇所を読む。
3、自分の気づきを待つ、です。

「歌詞が響いてくる時」がありますから、その時を待つことも大切です。

また、1フレーズごとに、1節ごとに2回ずつ繰り返して歌うという方法もあります。礼拝で実施するには工夫が必要ですが、2回繰り返して歌うことによって歌詞をより理解できます。

Q、オルガニストが聖歌伴奏の準備をする時、大切にしたいことは何ですか？

- A、歌う時と重複しますが、やはり、
1、歌詞をよく読む。
2、声に出して言葉のリズムを読みとる。
3、どのような礼拝か？会衆の人数や顔、歌声をなど思い浮かべる。
4、音の調整の工夫をする。などです。
誰のために弾くのか？を考えることが大切です。(もちろん、本質的には神さまのために、なのですけれど…)

Q、宮崎司祭が作詞された聖歌のなかの製作過程でのエピソードがあれば、教えてください。

A、改訂委員会が共同で創作した聖歌2番についてお話しします。この『聖歌集』で[第1譜]と[第2譜]があるのは2番だけです。同じ歌詞でメロディが違います。この2番の歌詞の原案を創りました。ただずっと[第2譜]の曲がセンチメンタルに感じて、しっくりきませんでした。特に「長い夜にも/朝は訪れる」のメロディなどが…。でも、東日本大震災直後の主日礼拝でこの聖歌を歌った時、気持ちが変わりました。絶望や不安でいっぱいの中かで違って聞こえ

てきました。「これが今の気持ちを歌うのにふさわしい曲なのだ」と。

2節の「風に向き合う時・・・試みにもがく中に/共に立つ仲間・・・」などは創作当時の個人的な事も含めた実感です。

当時、改訂委員たちは京都のパレスサイドホテルに泊まり込んで作業に当たっていました。3節の「風に押し出されて・・・」という追い風を思わせる部分も、[第2譜]の原案を作曲した鈴木隆太氏が「泣きながら一晩かけて創った」と、朝持ってきた事にも重なります。でも、それら人間的な思いを超えた響きをもって、2011年「3・11」からは歌われています。

『聖歌集』の最初の第1番は「自分たちの創った新しい聖歌で」という思いが当初ありましたが、現代の聖歌作家ジョン・L・ベルに敬意を表して第1番に置き、改訂委員で創ったものは2番にしました。1番を初めJ.L.ベルの聖歌はこの『聖歌集』で一番たくさん収録されており、大きな影響を受けました。

(質問者・原田里香子 続きは次号にて掲載。)

宮崎 光(みやざき・ひかり)

1965年東京生まれ。立教大学文学部キリスト教学科卒業。聖公会神学院卒業。上智大学大学院神学研究科博士前期課程修了。日本聖公会東京教区司祭。現在立教大学チャプレン。聖公会神学院非常勤講師(礼拝学・教会音学)。日本聖公会聖歌集改訂委員(2000-06年)、日本聖公会礼拝委員、日本聖公会祈祷書改正研究委員。

著書

・『聖公会の聖歌-いのちを奏でよ』(聖公会出版2008年)

・『「改訂古今聖歌集試用版」ガイドブック・心は賛美に、』(編集・共同執筆、聖公会出版2002年)、他

パイプオルガン委員会主催 レッスン報告

2014年11月(6人)自由曲

12月(5人)アドヴェントコラール

2015年1月(7人)ペダル奏法の基本

2月(5人)自由曲

3月(6人、見学1人)チャント

※1月使用楽譜：Méthode d'Orgue

MARCEL DUPRÉ ALPHONSE LEDUC 出版

行事報告

1月11日(日)15:00～兵庫県基督教連盟主催
阪神・淡路大震災20年記念礼拝
オルガン：井原由紀氏

3月2日(月)10:00～18:00

立教大学オルガングルド・春合宿

学生24人、チャプレンの宮崎司祭とシュター
ル司際、オルガニストの崎山先生が来神。

合宿プログラム終了後、合同で唱詠夕の礼拝。
オルガン：崎山裕子氏(立教学院オルガニスト)



(祭壇にて学生たちと唱詠夕の礼拝)

3月21日(土)10:30～聖職按手式

杉野達也司祭、浪花朋久執事が誕生

オルガン：井原由紀氏、大聖堂聖歌隊

ソロ歌唱・聖歌隊指揮・指導：喜多ゆり氏



(初分餐を行う、杉野新司祭と浪花新執事)

オルガンレッスン予定

4/12 復活節・課題聖歌 170番、181番

5/10 自由曲

6/14 自由曲(聖歌)

受講希望の方は教区事務所へお問合せ下さい

コンサート予定

パイプオルガン委員会主催・定期コンサート
10/31(土)15:00～

オルガン：井原由紀氏、ソプラノ：喜多ゆり氏

曲目 メンデルスゾーン：ソナタ第6番 op.65-6

J.S.バッハ：プレリュードとフーガ

ト短調 BWV535

J.S.バッハ：イエスよ、わが心の喜びよ

(ソプラノ 喜多ゆり) 他

前売り券¥1,000 8月販売予定

神戸ビエンナーレ 2015 まちなかコンサート

10/12(月・祝) 生田雅楽会

10/24(土) 清水明氏(オーボエ)

11/8(日) 神戸市混声合唱団

楽譜紹介

♪讃美歌21による礼拝用オルガン曲集全6巻
飯靖子・志村拓生編 日本キリスト教団出版局
讃美歌21に収録されている賛美歌の旋律を
主題とするオルガン曲が収録。

第1巻・礼拝では、招き、讃美、聖餐、派遣
などの項目ごとに38曲がまとめられ、解説付
き。聖歌集でおなじみの曲もあり、前奏、陪餐
などさまざまな場面で使える。

【編集後記】

「気づきを待つ」今じっくりこない聖歌でも、
その言葉と音楽が響いてくる時がある、と宮崎
司祭。なんだかピンとこないという聖歌に向か
う時、心地の悪さと後ろめたさを押し込んで、
「どうすれば？」と自問していたが、宮崎司祭
の言葉に少しホッとした。心からの思いをのせ
て歌える、そんな聖歌に1曲でも多く出会いた
い。宮崎司祭は「聖公会の信徒の歌唱力を信じ
ています」とも。

パイプオルガン会報紙事務局(神戸教区事務所)

〒650-0011

